

911.3
≡

三日月集



西上人東國よおすーいれうそ裁集勅撰

ありしを因て上流一けるをちしそし連

法原ふけいあひりう勅撰乃あををつひけ

るふとや披あしそ沙歌むれりく入る

いひりう時立沃のくくやるまると何事ん

そきいんはくあしそ言ふはあはとそあ

かしそあまうりやそ東あしそまじり

しそ難うの撰集の事わの友白圖かや

撰集志沙汰あり十と世紙絶めいし
りし云筆仙墨客の名よりうへえり
とおとる句をひりりせし茶箱ふのハ
めしすくふ遺稿ある事と此志紙
法心寺二三と補ふたをらくと人のまて
東國より帰るありし紙

享和二年一月二日

少汝

之日月集

白園撰

花鳥此等一或も好むる古寺の志紙
兼就院とてトすむしと世紙の巻この
寺不勉堂一

まゝあるまゝの月

かく是なり先出さしり亦お系坊本見をいつら
おの吟紙のうかりそこの月極紙の葉なる
と書しは五十年たきのやうなり尾破き本

葉つとり狐狸こし海より一人をさすぬよすこ
かろうぬあふ渡島のた琴は法華の伝實を
者多し河の上人の教いとさうりこり慶る紙
奥一小堂佛をたれよふきけふいとるこり
危中の松柏あは河は恒年の風色けり
とたく吟窓の面おあす履き時を河や

天明六年乙酉十月二日奥行

二日月よく竹を二日月 士朗
四時かやりの夕ぐれの松 暁臺
空の道行人のまゝり 萬岱
葉の飄と川かひさし 岳輅
意のきんねるてどうし 扇毛
かうやういふる意 岱青
唐赤き毒の花の老乃枝 他郎
祢なげあはるる 沙漠
ぬのきさるいふるふきこる 茶雷

定利源の衣ほとく

紀風

う川ふせくおけは鏡は深もか

少汝

秋海棠のほきかす敷

白図

まじくと風吹むふ根

羅城

踊衆してとる長

演

朗

や月とてとこやう坊とてふや

青

もの隈くまききけり

萬

菅公の御おのき

輅

土筆たうりおのきく縄の上

毛

為星とてりく虫よさきさう

漢

山城すくふ法うともさ

郎

雅曲たうきくと列すむら

因

河の波もさる新岬の中

雷

富初る増はむさう小遊あ

鳳

疎屋のまぢ六おさうと

汝

大宮目の志はる遠と笑ふら

朗

のー川むする筆のう

城

男山名葉の小ぬ白ふ

萬

に國めくくやうりあひさき

輅

有明よ吐息はきこるつめ酒

毛

露の睡かき掃くし

青

の酒或香飯あつりの秋江

郎

此の控場そと古家とくふ

朗

くわくと羽織すくひてまき枕

汝

亦外きほを地日和ありらる

風

五と何る花沢河川めく山嶺

園

風雅とと流乃陸ひろる

漠

二日月

唐姫の穂くひふなひけこの月

曉臺

箱日々二日月ちきる川柳

他郎

鴨一羽横りまはるこの月

騏六

丸ふ外れものこをえなすこの月

蝸角

百舌鳥の尾めをの延しこの月

岱青

うをむ乃やふ入ありこの月

大阜

夕々水の石やけいめんこの月

白園

二日月の袖へ金と見えぬ那 毘加
 二日月の石山寺おぼしき流石 木人
 二日月の傾き形ある潮の音 巨川
 二日月の過やばか人立しき言の力 杵兄
 二日月の草の夢もくさるる哉 扇毛

時雨 六のり

香門のぬきもおのしき初時ぬ 来山

志らくし川便も萩の枯葉よ小 宇洋
 志らくしとをや月の出る小川 五道

志らくしや霜とねる響枝の風 霜居
 志らくしをぬきて見ゆるを初時雨 江戸一蕙

志らくししてきて来てあやとの時ぬ 大和 馮月
 志らくしふ鳴かりしる鳥う那 斗入

志らくしや小所くたそ幾世ある 田寄 趙息
 志らくしや川に流むる雀 也人

六つしやまをなほ追首の周 イナハ 一之

かきあー 枯尾花

兄好まを記めもあは枯尾花 草人

風の尾花をいしてかきておる也 イナハ 伯先

むし雨もすー解ーとよ枯尾花 蘭水

かきあーと影紙えうとて淋いそ エト 胡集

林あしはひとるかきあーに哉 坂本 許風

冬月 水鳥

あーまを乃ちまぬやまはよその月 李臺

その月かーくーの木後うか サツメ 巴水

あーけぬく枯尾花うその月 葛齋

登う家むーろくけうその月 大ツ 武昌

淋ーさもまーて鳴出る小鴨水 啓申

去の木此屋るれ形も鳴濁 花叔

一巻

みらこ

もろや 簀ふ雪をさしぬ 春曉
 けし 白の糸くふ雪のかりけ 重厚
 音ちりく 海士の思髪くまゆ 越後 左琴
 憂つむや 海きりく 下作の奥 蘭屋
 人ふついで 音けりく 延々白哉 希言
 掃あふ 瓜落りく けりく 音けりく 南陽

雪の友さく ふるまんの ありき 庭南
 ふる里や わらぬ 音けりく 梅間
 こころや 城下を けりく 春蟻

落葉

氷

霜

冬籠

戸はまきく 庭葉ふく ゆく 庭南 サツニ 窓巴
 夕暮や 庭葉ふく くるよ 大ッ 飛梁

小胃麻のふりしきくあるは葉也 二奉松 眞也

見るかしのあまうりり重うか 大蘓

山々の若くきくぬまお灰うか 万岱

葉のまに何と若やく一ツ層 長弁

雁の鳴山うけとよれをふとり 魯隱

をある立 枯野 雜

おあやとちりいんてゆをある立 イナ 鸞鳥圍

常は血と並里乃の事は成 スハ 青以

月も音とらぬふりりのありん スハ きとあ

を言佛々のほふあうりり 杜石

はるやあらんまの申しおの水 猪来

孔子盗跖一塵埃

較くらぬ人ふもすくまらまや 成羨

寛政四十月八日真行

そのまゝのつまをえても輝あり

白園

日まきくくとまゝのふるさち

岱青

鳴麻のわし——けう紙花紙

士朗

皮革かゝるめはひちり——

徐英

椽はきふ山坂と藤るる月の人

大阜

凍法かつき——草の鞋乃秋

昆明

くさる瀬のあはれをうたひ鳴

騏六

かけふののらるる夕ぐれ乃春

園

玉襟土着乃出をとり小物事

青

顔又せあま一年池乃津

朗

書そ然も二の町をまた流

英

くくひす小船めら藤あま君小

阜

すんくうとありのまゝある晨鳴

明

とせそくハ道或字活山の音

六

秋をま小瓶の水とあまらう

園

らふの所もけふハ七十

青

ちしんを不巧極の突もひろく
朗

砂一書ふ我に月乃的
英

くしくと煙の口かく取もすう
阜

池江小女のよのいまひする
明

海よとりかもくさく風のあ
六

なぬをくはなぬかこりまよや
固

う坂の社まひくを獅子頭
青

戸板はとあね舟脊頂あ
朗

たけしうぶをあつ祿てもおひす
英

硯の海乃かこくおしも
阜

かきまは老ふりしを柳影
明

秋とらいつく不破乃夕夕
六

牛杖のふもセツめあぬ月
固

酒くむく先乃地磨あ
青

あゝの漕とくはもえある浅井や
朗

香羽の千浮城をよるに五人
英

燕多月て解をうり日此つる 阜

かりりー極をるあふさうはく 明

中けりだふあふはまかめんらう 六

余を元けり彩霞樓 上 朗

歳旦

春くれはまふありりり 美山家 松本 冬花

浮路のあぬ乃馬糞を掃ちまをる
妻の阿いし阿川より浪よまをる

門まのりるよりえんやるる居成 十列

えの気娘ー二言ハおも志りー 大左

梅柳 春水

碎けのやうにけり乃梅の花 計之

輝くものよのハ河のす物花 七五 十邑

とーいほり時あハ咲り梅の花 兆玄

春と月とを此間五入んかり也 岳輅

草かり柳をまなくあふり 百池

おろそくや柳ふよれはすしほ

吐牛

丹波

むすふまゝしほ世よゆるまのち

青阿

常 舞

常や春州の戸ふ扉もあし

桂五

うらひすや人のう成世を唱へ

雄測

常は屋根うたまゝしほふか

巢北

しく花きの度る所をそけ焚む

北風

本六

常の唱あせづらす川の風

五雄

うらひをふ志たしくかきむ指哉

遠州 琴波

花のまゝえいすれ又はなぬ

柳庄

月も日も花の中あし音は山

大魚

春は日のたをきも花のちうす

天老

あそもあそむる花あし月乃歌は哉

兵庫 吳来

ちる花はけしむゆる山家水

物知

曙の花うらよるものもぬし

虎杖

丹地此歌はむ月まじり風晴水

騏六

吟苑と云ふやおもや峯の寺

方朔

牛の角冠は庭ぬもし衣あり

如毛

くさくさきり若うるこ後

人里を去る乃真あり山さくら

玉江

淡雪のあはも花の河し山

丈雲

けくらの口ききとえし山のけ

猿左

一とせ乃お雪張らつめる様を

草龍

雀鳴りとちくくとけく成

百席

家友の老のそしめや庭はくら

徐英

花二百のちいさくしてあはまが

素郷

花盤あるとけりおきかうりうり

樗堂

さへう咲てきま松のある成

椿堂

春雨 かきり

春地ふやくとくれあはる雨あり

蕉雨

春雨の夜もまらへり河内が那

双鳥

とひくふ家河の壁邊の春はゆ かつ女

春の雨とくより原き本の写本 松本 真篔

朝かすこ万葉村の河より哉 大魯

すきき 帰

今がけいあーおともか萱岬 エト 一茶

秋ききのこし林くも萱うか 延之

高し月と桂ぬすこの糸る半と 布舟

りおひ糸はきのあを原のけりか 桂裏

原くの日よき人 旅の船藤哉 関叟

春月 春風

通糸うねきすくよ春の月 魚堂

春は秋乃月も雲はかりり 雲市

春を春のよきす物をぬす春の月 沈君

馬肥乃野よきす春の月あふ 京 可董

ける月綾瀬乃水より川 川 菜波

夕波孤舟へ出りて春乃月 スハ 若人

燈^京 蘆 涯
 州 葛 井
 春 士 峯
 春 柳 涯
 春 卧 央

雜子 春春

何 東 水
 雜 射 道

馬 市 之 歌 之 雜 子 之 ^松 喚 之
 春 春 春 春 春 春 ^福 鳴 春 唄
 春 春 春 春 春 春 ^代 吐 丈
 春 春 春 春 春 春 雙 南
 春 春 春 春 春 春 墨 山

雜

正 月 之 歌 之 春 春 春 春 了 國
 春 春 春 春 春 春 春 春 外

とら〜と海不知〜生地山 松本 可考

ひ〜ある者〜あ〜ん 松の本 泉阿

者〜う〜漢地見〜ひ 春日 三列 歳久成

病下里〜回面見〜は 喜野哉 武二百年 定雅

菜の花乃いつまて 空に松の家 素外

交〜さもめ〜れよのよは 地心 イセ 推己

登吼る女〜枕乃 春也〜か 一音

か〜れ日地 汐やとこま〜すき 玉之

松風のひ〜う〜まき 市代 沙鷗

正月のか〜り〜ん のお 鶴う〜り 白園

まのく〜き一 際〜く 春より 松本 雨暁

志〜魚の〜とげ〜う〜く 水の 大坂 祖淳

沐代〜り〜か〜るや 麻の〜か〜 芳中

枇杷の〜き〜か〜うの〜か〜る 恒根 イセ 鹿明

風ま〜く〜空〜 二月のあ〜男 アキタ 五响

時多 卯花

暁のうけまはらのよかきまは 昆明

鳴ぬりハ雲固りかきす時を 金鳳

かきまはせのまひく梅成 イヒタ 蘭二

音力の二度けはては イセ 杜影

ほしきまはけいあくる水の音 ヒラ松 志乃

日枝小雲川かきせうは ヒラ松 白園

卯の冠は ヒラ松 亞溪

けー 又立 五月五

けいんや梅を捨るち急もけー 長翠

あやとハあやめうえの五月五 干當

五月あよとけぬとのハ梅成 魚秋

あけけい 大坂 五廣

名まよとけぬ 大坂 素磔

呆呼鳥 鴨牛

ほしを 蚊を

友とすまはるもさるめはる

桐栖

志のふまゝく〜かんこる

六悟

くのみぬ道しをけき鳩牛

スハ 芸門

あまのほのこまよのゆる蛇牛

呂理

清井つらふ川連くるかろう

固サキ 入素

志のりや螢おるる食のみ

スハ 自徳

雨まや蚊やうまゐる松のく

八代 斗睡

短夜

夏月

夏秋を扇のまもふりりる

蛙聞

こゝの秋やとり月とくも庵の友

松本 仙市

天神開眼

あまやちき秋ありりを服とめ

エト 無説

河げ易ま秋はたのまふあ白

宇六

み〜の秋もさあていとみ山家小

イセ 宗古

く〜と〜門へ出さる夏の月

スハ 千丈

涼しきふ月もいそぎや

莫二

いろせ川

はらきむしをよれ水鶴

青川

雑

夏乃日もかゝるゆゑのあれは

野雀

牛の子ふみふもかゝるゆゑの雨

阿彦

去る夏の卯月をかりし山家

上穂 汝蘭

言野山

澄ちりく流を遠く苔の花

干下 文儿

夏の雨牛より雲地起り

越中 吳山

清波や伊勢の田植は

五周

みづの波やすしは竹の月

武陵

けほりや取も雨のかさ

濱藻

心りおのひる

まげまの麻の道は

みちる

竹酔日

何人すむかの玉と源和尚の墨蹟紙にやーるる
こしあるまじく小庵よみてーけ人一日予う竹
庵と訪いましり予問て日子ハ白隠乃筆と
やーのあま手手何りよまかの和尚の禅どか
ういあうややほまその徳と仰きたまふや
善きいふこれもとすり禅味と云れり
まハその徳を仰くも何れんをけき
庵の花乃とく竹の窓乃ことくまこハ後
指のこまきとの紙かきあうたーさう
それとめりこくたれあうとてけしを
其のあうと物ある人あはれあり
子つひふよりをいふいとあとのまきとのあふ
まきとをもあうとてあふあう実も
さうよけあまきとよとてうあうまきりぬ
け日竹碎日あまハをやまうあふあう紙て
あまいぬ

竹植てはやくもかけ紙をのむいふ 少女

け日とあふいあふくこの真

植てのく竹ふあふく吉紫式 白因

あやうくと紫のある竹紙植はり 魚堂

こ紙小植する竹ハ紙も紙を 布泉

植ます竹の根とはく地牛 大阜

竹くあるひまきまきせよかき紙 天光

雨と植る竹ありあれとあるふ 卧央

竹植てあまき植るうり若乃花 士朗

巾櫛くもや一日はあそぶら

羅城

竹櫛よりまよふらるる佛の身

徐英

月さけふさそひて竹を櫛より

松兄

巾櫛くねをまふくぬま色

方明

ふまがり竹ふ者なる旅の床成

岳輅

竹櫛よりあつつく寺の男ふ

行脚

玉屑

山傍幽翠

すくくは秋まよわぬ桐火桶

桂五

光のすむ芒の中此丸家の中

騏六

夏月清蔭

曇く或世の人をえらうか

干當

いさくおまはあり河ありをまの

椿當

清節凌秋

藤のゆふ風むしる雀の影

青川

はためは秋さきくおふり

瑞馬

幽叢勉烟

八日月常照ふふくまきとまき

成茂

夕立やもやあつらふて山の山

芦丸

故やう火や牛にふか又飯所

自樂

虚心友石

石落の夢ふ池かけさるひらり哉

南陽

何志やんしきさる水の花と流

猿左

湘中清心

あふさるる水とひらりあふさる

斗入

すむふあふ〜〜〜

井六

清晨帶露

志月あつらふ雉子の尻尻ひく〜

蕉雨

よのきふあつらふさるい〜

一卓

清風高節

月うけふ〜〜と鉛の何〜

素磔

鳥の巢とちやと鳴しをたろ〜

了因

露凝寒葉

志くもくやねをた盤の時おほく 騏道

しうらあよよのいひきおあ水 可都里

を川かす祇屋のあともあまう ミヤコ 双南

朝雲密翠

このかぬ扇ふうりていへきま 其成

ふ月ぬのりふあうり泣ふしこ 魯隱

緑蔭漣漪

とよくやき穂よ出るあふのが 柳莊

秋風のりふ蔭を有る徳村武 樗堂

移竹半凋

旅人とちうくは吹やあきの風 卓池

層あて水のかきりふ入日く那 困瑞

家くのねしそ見ゆき高の津 宇洋

鳳枝吟月

みーのあとのあはれりあり 白居

くま牛うり風吹をせりまはり 叶竜

前面寒光

きわらやうふ志のりき枯尾花

友國

樹の多れなくぬもせぬ子の音

長崎

日のぼくぬふえりうそる海

景山

享和元秋七月廿五日興行

藤とさうひろきくる小庭哉

桂五

との端より柳む秋の日

少汝

月や雨あめやうもるは友のん

羅城

嵐とあはれははげぬ志の砂

魚堂

よふすゑて又も寝るうつせ貝

松兄

とろく連のかんねる風

大阜

雪のほくも鳴もかきくみ

天老

くま風とつくる初瀬の心月

玉江

吸よのふつまこはふる屋かり

五雄

音うやめりん夜の志くま

葛井

張すて細のうり鴨の声

橘良

多野田ハ敷のまふりりま

嵐堂

すす衣ふ卒於婆乃文字を以包

岳輪

河うるま、居るくしす又母

蘭屋

花もまや叶のたひまき日比そ

方明

をさふくるる月のあり唯

霜居

雛子の尾り、妻の裾とちり居

東水

まゝある下や野辺のよまら

梅向

僧服の火は忌ぶるわら碓りか

士朗

傘さし、かける雨のいも、火

五

猿籠り、何とらひひ、根敷垣

汝

こゝろ、度り、かゝる葛の糸

兄

白足袋の、あそは、あき、落氷

堂

琵琶と見る、極、祿、あふ

光

松風の、一、野田、く、を

江

すこゝの、ひま、り、強、五、位、階

雄

かゝる家、又、殿、中、あ、う、り、を

井

いとすくひほと成とる内 良

おし如つ西の芒乃尾花して 堂

芙蓉のよととどつを御車 輅

あつ眉の白さも折ふれしきハ 厓

藤よととれとあそぬ子依等 明

ちりひちハ歌息も此種又勃さる 居

壁のやふれり一見ゆるるる新 水

喜柳の青生はけりうり花もあ 旬

度~~~~~ 恙 柳 乃 三 州 城

初秋 星夕 盃

鳥の鳴ねとあま秋とらぬ 越 巢

あうやとハ相の及持て秋早 滄 波

鳥鳴やあへく又るるて 海 可 疑 星

夕管や常又せうせうと天の川 壺 伯

おは涙乃春小宿る星むく 白 因

秋と春星乃流々入江の舟 紀 風

老やかゝるるも過ぎや老ぬる葉の舟

北南

〜〜葉やいもり門火の夕照

秋國

朝魚 さめ

いく程の世に舞うる松乃枝

士朗

咲かたり〜朝魚のあ〜〜哉

自樂

あや魚のひらひらあ〜〜旭代

大坂

尺艾

藤や飯の流るるに於麻山

玉湖

碓氷川敷のせきりも月夜うか

イヒタ

蛙村

松風の音ふり〜〜を

碓

せと女

北蘭 菊 萩

香瓜ふ〜〜葉よ踏〜山崎小

月居

かくれ家よある程の葉は〜〜危

エト

神社

秋の萩さき〜も月ふ〜〜きりり

サツ

琴州

又〜〜居きハ淋〜〜ぬ萩の花

嵐堂

去〜〜菊の流飯よ〜〜萩すき

李園

れつけ〜〜や〜〜き菊の姿うか

ニヒ

砂文

此の家もいづれあり萩の花

卓池

仲玉の秋めきりうらまきれむ

帯楳

小鳥とよ山中とよりりるに麻のほ
いさかけけたたこさしるを道の端ふ
はきす冬くけきますし男う肩り
又ふ哉と詠するたとけらとねふしを

秋のくく小乾くぬ麻のめも哉

羅城

秋の勢 秋の音 芒

秋のやもる花ても秋乃う勢

井六

くのおもい人とあはれも秋の風

喜年

秋風の吹くのはさびしきあの上

上穂

山阜

あき風の吹くくさのむらら

左雀

あきし朝と又吹あはれ秋の風

山嵐

庭をけハ掃やと淋し秋の音

蒼虬

夕くまのけきまゆらたは芒ふ

瑞馬

風の尾花より袖かけて吹くぬ

子東

露ありけき芒ありたけ秋のぬ

少汝

きりくも

秋の聲

音 庭のりー 音秋

秋の明を照つてけりんきりくも

如東

朝きりふえんかききする世東家哉

さよ女

と井さの種ふすうもや秋の聲

祐昌

くきゆれきまて秋やとせむん

橋良

おとけくや衣ふとゆる秋の聲

白居

いりきの集ふらねらくと深。

えりけぬも不思議なりう庭のり

全

雜

あふれくすふらあふあふ運りう

乙二

あふれや秋のりふ鳴るは声

一州

八朔の梅さくあふらなれあー

文飛

くとんきく鳴りう秋の山かきん

瓦坊

稲妻やあふらも今がー

葛三

雪乃古巢もえんかゆられ

圃曉

二子のこゝろ

かくれるに木槿垣根や涙も

梅固

あうけは抱て鳴や秋月蟬

一炊庵

海草野や露のくりに乾や

冥々

かくて了と日る心なれ秋の山

硯静

丸

名もやは外一めさく川むく

都貢

水よむく家のひくさよ秋の月

サカ木 魚村

雲よ流は夕度ある月のり出成

尾 壽松

月すむや深窓のかさう瓜拂ひる

周瑞

のるほくをまは月の輝あり

魯堂

あはれあやの松をほつきて後の月

宇曲

家秋ハ丸我くふいとけい

竹有

涙ハあや一とを中よ秋の月

方明

享咏二年春二月

少汝補



文化十一甲戌星次仲煉下旬

文好寫焉



明